

秋山虔・木村正中・清水好子編

講座
源氏物語の世界

第六集 梅枝巻く若菜下巻

有斐閣

虔・木村正中・清水好子編

有斐閣

源氏物語の世界

第六集

梅枝巻／若菜下巻

編者紹介

あき やま けん
秋 山 虔 (東京大学文学部教授)

き むら まさ のり
木 村 正 中 (学習院大学文学部教授)

し みづ よし こ
清 水 好 子 (関西大学文学部教授)

講座 源氏物語の世界〈第六集〉

昭和 56 年 12 月 15 日 初版第 1 刷印刷 定価 2,000 円
昭和 56 年 12 月 25 日 初版第 1 刷発行

編 者 秋 山 虔
木 村 正 中
清 水 好 子

発 行 者 え ぐさ ただ あつ
江 草 忠 允

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町2~17
電 話 東 京 (264) 1 3 1 1 (大代表)
郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区 田中門前町 44

印刷 株式会社 精興社・製本 株式会社 高陽堂
© 1981, 秋山虔・木村正中・清水好子. Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN 4-641-07106-3

はしがき

『源氏物語』は、『万葉集』と並んで、日本人の心の中に、永く生きつづけ、近代の文学にも大きな影響を与えている古典中の古典である。まさに日本人の心の故郷ともいふべき世界がここにある。

さて、その『源氏物語』の研究も、平安時代以来長い伝統をもち、その積み重ねの上に、今日では多彩をきわめており、なお、つねに新しい課題が取り出されて、尽きることがない。すなわち、成立論・構想論、あるいは作品成立の歴史的背景の解明や準拠論、作品の内在的展開に重点を置いた主題論・構造論、さらに表現論・文体論、とくに「語り」や草子地の問題、また作品に内包される諸種の思想の追究、王権論・神話的構造論など。それは、この作品がもつ無尽蔵の内在的意義と、複雑な機構とを考えれば当然であろう。

一方、このような作品総体を対象とする研究とともに、注釈的研究の発展も著しい。注釈的研究は、もはや単なる平板な訓詁の学で終わることができない段階に達しており、叙述に正確に即しながら、個々の部分に内蔵される文学的意味を明らかにしていく方法が要請されているのである。こうした、各巻の内部からの問題点の把握が、作品の総体的な考究と深くかかわりあっていることはいうまでもない。つまり、『源氏物語』の個々の局面の「読み」の中から導き出された視点を、作品総体との連関において確認し、それによって『源氏物語』の展開をいっそう明確に跡づける、——こうした反復作業が『源氏物語』の理解をさらに深めていくわけである。『源氏物語』を「読む」とは、要するに、

さまざまな視点からの作品分析を相互に媒介させながら、いま読みつつある部分に内在する特有な作品論的意義を具体的に明らかにし、『源氏物語』の本質に近づいていくということなのであろう。

この『講座 源氏物語の世界』は、右のような『源氏物語』の「読み」を実現したものである。巻の順序に一応従い、その巻をめぐって存在する主な「テーマ」を取り出した。それらは、巻固有の場面的ないし巻論的な方向、他の巻と密接に関連していく構想論的方向、時には全体にかかわる美意識の問題などの考究として、また物語に外在する背景的な諸要件をその基盤として捉えることによって問題を明らかにしていく方向へと、それぞれの「テーマ」の性格に応じた方法をもって究明されている。これらの「テーマ」の追求が、『源氏物語』とは何かの問いにこたえ、さらに、この物語を読むための具体的な手がかりともなれば、まことに幸いである。

なお、「テーマ」は、従来の研究の達成の中から、編者三人が設定し、それにもとづいて、数多くの執筆者に自由に論究していただいた。また、各集には、『源氏物語』に深い関心をもっておられる方々に、より広い角度からのエッセイを寄せていただいた。これらの方々の御協力に深く感謝する次第である。また、いろいろとお世話になった有斐閣編集部、澤井洋紀・林喜代子両氏に厚く感謝の意を表したい。

編者 秋山 虔

木村 正中

清水 好子

執筆者紹介 (執筆順)

三田村雅子
加納重文
鈴木日出男
武原弘
高橋亨
大朝雄二
小町谷照彦
清水好子
山本利達
木村正中
秋山虔
伊藤博
石田穰二
室伏信助
吉岡曠
野村精一
〈源氏物語と私〉
佐佐木幸綱

早稲田大学文学部講師

京都女子大学文学部教授

成城大学文芸学部助教授

梅光女学院大学短期大学部教授

名古屋大学教養部助教授

北海道大学文学部教授

東京学芸大学教育学部助教授

関西大学文学部教授

滋賀大学教育学部教授

学習院大学文学部教授

東京大学文学部教授

中央大学文学部教授

東洋大学文学部教授

跡見学園女子大学文学部教授

学習院大学文学部教授

山梨大学教育学部教授

歌人、跡見学園女子大学文学部助教授

目次

〔梅枝巻〕

1 梅花の美 三田村雅子 1

六条院の春 判者としての螢宮 幻巻の回想 色も香も 紅梅の位相 付加価
 値としての薫香 紫の上の傾斜 回想の梅花

〔梅枝巻〕

2 薫物と手本 加納重文 16

明石の姫君の入内 貴族と香 薫物合せ 螢兵部卿と朝顔の齋院 手本の蒐集

〔藤裏葉巻〕

3 光源氏の栄華——光源氏論(4) 鈴木日出男 31

准太上天皇 栄華の構図 六条院行幸 行幸の和歌贈答 光源氏の血脈 栄華
 のかけり

〔藤裏葉巻〕

4 夕霧と雲居雁の結婚 武原弘 49

玉鬘の登場と夕霧 紫の上と夕霧 源氏と内大臣の和解 父と子 夕霧と雲居雁

の結婚

〔藤裏葉巻〕

5 朱雀院の人間像

史実との重なり

公と私の逆転

母と父と弟と

桐壺院の霊

聖代の影

高橋 亨

61

〔若菜上巻〕

6 女三の宮の降嫁

はじめに

今井・石田論争と秋山論文

女三の宮の素姓

女三の宮婿えらびの発端

女三の宮の幼き

婿えらびの経緯(1)

婿えらびの経緯(2)

二人の「紫のゆかり」

光源氏の回顧的姿勢

対の上・紫の君

玉鬘退場と紫の上の境遇

おわりに

大朝 雄二 73

〔若菜上巻〕

7 紫の上の苦悩——紫の上論(3)

うらなくて過ぐしける世

移れば変わる世の中

夜深き鶏の声

小町谷照彦 93

〔若菜上巻〕

8 朧月夜再会

朧月夜退出

紫の上の悲しみ

色好み光源氏

朧月夜の業

清水 好子

110

〔若菜上巻〕

9 光源氏四十賀

山本 利達

123

四十賀の計画 玉璽、若菜献上
の賀 帝の委嘱で夕霧執行

女三の宮と紫の上

二条院で紅葉賀

公的規模

〔若菜上巻〕

10 若宮誕生——明石一族の宿運(1)

木村 正中

136

明石の姫君入内

若宮誕生

明石回顧

明石入道の消息

孤絶する人間像

〔若菜上巻〕

11 蹴鞠の日——柏木登場

秋山 虔

157

女三の宮の婿選びの経過
ける女三の宮と夕霧
木 柏木の自滅への道

女三の宮降嫁の後

若菜上巻当初の柏木像
蹴鞠の日のかいみ

六条院にお
恋に盲いた柏

〔若菜下巻〕

12 冷泉帝から今上帝へ

伊藤 博

177

光源氏の栄花 繁栄の中の虚無
行方 光源氏王国の斜陽 四年の空白と真木柱の結婚

歲月の空白をはさんで
紫と紫のゆかりの物語の

〔若菜下巻〕

13 住吉詣——明石一族の宿運(2)

木村 正中

190

六条の女御・明石女御 住吉詣
の意義 明石物語の結末

両度の住吉詣(潯標・若菜下)の比較 「幸ひ人」

〔若菜下巻〕

14 六条院の女樂

石田 穰二

208

若菜下巻のはじめ 女樂の次第
花のよそえ 桜と橘 音楽

物語の流れの中に 場面の意味 女樂の意味

〔若菜下巻〕

15 光源氏の述懐

室伏 信助

227

栄華と憂愁の人生 幻巻の述懐
述懐の位相 御法巻の述懐

述懐の背景(1) 述懐の背景(2)

〔若菜下巻〕

16 紫の上の憂愁と発病——紫の上論(4)

小町谷 照彦

240

さがたきほだし 身に近き秋 かばかりのこの世 世に久しからぬ例 もの思
ひ離れぬ身

〔若菜下巻〕

17 柏木の密通と発覚

吉岡 曠

258

柏木の再登場 「柏木の恋」の内的必然性 密通への経緯 運命と柏木の〈性格〉
六条院王国の崩壊

〔若菜下巻〕

18 試案の夜

野村 精一

278

賀宴の延期——延びきった時間 内部の「時間」と外界の時間 完璧なる対話——抑
制された「時間」 試案の夜——もどらぬ年月 「時間」の断止——ことばの終焉

〈源氏物語と私〉

貴族社会と和歌

佐佐木幸綱

296

『講座 源氏物語の世界』（全九集）総目次〔巻末〕

テキスト対照表〔巻末〕

凡例

- (一) 『源氏物語』の原文引用のテキストは特定せず、各執筆者の判断によっています。なお、漢字、仮名づかい、句読点等で、必ずしもテキスト通りでないばあいがあります。
- (二) 主なテキストの略号は次のとおりです。

『全集』——日本古典全集（阿部秋生・秋山虔・今井源衛 校注・小学館）
 『全書』——日本古典全書（池田亀鑑 校註、朝日新聞社、現行版による）
 『大系』——日本古典文学大系（山岸徳平 校注、岩波書店）

『集成』——新潮日本古典集成（石田鶴二・清水好子 校注、新潮社、刊行中）

- (三) 巻末に右の四テキストの頁対照表を付しました。

- (四) 各章（「テーマ」）で使用したテキストは、章ごとに記してあります。

- (五) 原文の漢字は、原則として新字体によっています。

- (六) 原文のふり仮名は、歴史的仮名づかいになっています。

- (七) 原文中の「」内は、当該の章の執筆者による補注です。

各章のタイトル脇に、『源氏物語』の当該の巻名を付しました。巻名のない章は、『源氏物語』中のいくつかの巻にわたる「テーマ」、または、美意識の問題等、全巻にかかわる「テーマ」です。

1 梅花の美

三田村雅子



六条院の春

六条院の花であり、男達を惹きつける「くさはひ」であつた玉鬘が、唐突な（裏切りの）結婚によつて六条院を退場してしまつた後、再び六条院は春を迎えた。残された唯一の娘である明石の姫君の、こちらの方は期待通りの成人・入内という退場の時を控えて、物語は寸時おだやかな春の日々をとりもどすかに見え、延々と繰り上げられる薫物合せから草子競べに至る嫁入仕度の営みはそれなりに充足して物語の表層を埋めていく。

かつて玉鬘に懸想し、失望を味わわせられた求婚者達もいそいそこの入内準備に協力を惜しまない。それら求婚者達とて、鬚黒と同じく潜在的には光源氏の世界に対する侵犯的な性格を持たないわけではなく、そして事実、柏木による決定的な犯しもやがて描かれることにはなるのだが、とりあえ

ず、彼らの対立やいどみは、光源氏の「合せ」という企画の中にとりこめられ、飼いならされて、六条院の風雅の世界に奉仕させられているのである。

六条院の婦人達を中心とする薫物合せと、かつての求婚者達を中心とした草子合せとは、二重に六条院のそのような「調和」の本質を象徴するものとして描かれていく。螢宮もその求婚者の一人ながら、判者として重要な役割を担う人物として描かれる。物語は螢宮の六条院訪問の場面から開かれる。

二月きさらぎの十日、雨すこし降りて、御前かみまへ近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほどに、兵部卿宮渡りたまへり。御いそぎの今日明日にけること、ととぶらひ聞こえたまふ。昔よりとりわきたる御仲なれば、隔てなく、そのことかのことと聞こえあはせたまひて、花をめつつおはするほどに、……（梅枝、『全集』(3)三九七頁。以下、原文引用は『全集』による）

雨に濡れ、一際色つやを増し香を増した花をめでののは、白楽天好みの、当時よく見られた（たとえば、『宇津保物語』の女一の宮、『枕草子』「木の花は」の段の花々、『源氏物語』野分巻の紫の上など）趣向であったが、春雨に洗われた紅梅のもとにあらわれる螢宮の姿は、絵のように美しいものであったに違いない。しかしここでの螢宮は、単に美しい貴公子として花に配するにふさわしい人物として登場させられたわけではなく、花の美しさと香り高さを心ゆくまで味わい尽し、さらに種々の薫物の中に、合わせた人々の心しらいを微妙に嗅ぎわけ、評価賞讃する鑑識者（判者）でもあったのである。

判者としての螢宮

鑑識と言っても、源氏に似て、やや劣るという容貌・人柄の設定そのままに、螢宮に期待されるのは、独自の判断でも見識でもなく、光源氏の判断・意志の代行・代弁者としての役割であったと思われる。梅枝巻の随所で、光源氏の感性に密着し、共鳴するようなかたちで提出される彼の判断は、光源氏の期待に沿うように六条院の秩序と調和を浮かびあがらせるようなものであった。

梅枝巻に限らず、玉鬘十帖（玉鬘巻・真木柱巻）における螢宮は常に「見る人」「聞く人」「判ずる人」であり、螢の光のもとで、玉鬘の鄙育ちとは思われない美貌を確認したのも螢宮であった。光源氏によってそのかされたその種の垣間見や判定が常に螢宮に委ねられたのは、光源氏による光源氏のためだけの閉鎖世界である六条院の美的・文化的レベルの高さを外の世界に対して客観的に証し立てる必要からであつたろう。六条院が俗世間のわずらわしさから逃れた光源氏の理想境として設定されればされるほど、六条院そのものは、現実感の薄い幻想に近づいてしまう。それが絵空事の世界でないことを、他者をも納得させ、圧倒させることのできる世界であることを証明する窓口として螢宮は選ばれているのである。

同じように、野分巻における夕霧の連続的垣間見も、光源氏の許しによるものではないが、六条院世界に客観的な第三者の視座を持ちこむものとして理解されよう光源氏の親しい弟と、息子という最も近い近親による「見ること」が、他に卓絶した六条院世界の理想性の証言となつていのである。しかし親しいと言つても所詮弟であり息子である。内なる他者としての彼らの視線は時として「見る

こと」犯すこと」のきわどさを含んでいる。一步間違えば、六条院世界の存立を揺がしかねない可能性を胚胎しつつ、内側と外側のあやうい境目で、彼らは「見る人」となっているのである。

もっとも、同じく「見る人」であっても、光源氏によって導かれる螢宮と、光源氏の関知しないところで、ひそかに批判的なおけない視線をめぐらす夕霧との落差は明らかである。夕霧の不逞な垣間見は、父の權威への挑戦という意味で、やがて若菜巻の柏木の女三の宮垣間見に連なっていく質のものであり、あくまで光源氏の了解の下に、「いづ方にもうらやみな」い温厚な判断を下していく螢宮とは対照的であると言ってもよからう。

光源氏の垂流に甘んじるもの、光源氏に近似しつつ、その色好みとしての犯しのエネルギーを欠落させる者、というところに螢宮の位置があり、六条院物語にとっての存在意義があったのである。行為者というよりは認識者としての役を割りふられて、螢宮は常に失恋者に終わることを余儀なくされる。

幻巻の回想

しかしながらそのような螢宮であるからこそ、光源氏にとって螢宮は最も気の許せる親しい近親となるのである。幻巻において、紫の上を喪った傷心の光源氏を唯一見舞うのは螢宮であった。「疎き人にはさらに見えたまはず。上達部かみだちなども睦ましき、また御はらからの宮たちなど常に参りたまへれど、対面したまふことをさをさなし」(幻、(4)五一三頁)とあるように、他の兄弟である親王達にも上達部にも会おうとせず、ひたすら自閉的に閉じこもる光源氏の警戒を解きほぐすただ一人の例外とし

1 梅花の美

て螢宮は六条院に迎えられる。

兵部卿宮渡りたまへるにぞ、ただうちとけたる方にて対面したまはんとて、御消息聞こえたまふ。
わがやどは花もてはやす人もなしなにか春のたづね来つらん
宮、うち涙ぐみたまひて、

香をとめて来つるかひなくおほかたの花のたよりと言ひやなすべき

紅梅の下に歩み出でたまへる御さまのいとなつかしきにぞ、これより外に見はやすべき人なくや、と見たまへる。(幻、五〇七―八頁)

ここで追憶されるのは、何よりあの梅枝巻の梅花のものと交歓であり団欒であつた。平板で单调であるようにも見えた梅枝巻の薫物合せの日の情景は、六条院世界最後の残照として、最も六条院らしい屈託のない日々の象徴として選びとられている。その時を分けあい共有した証人として螢宮の登場が要請されるのだと言えよう。そして幻巻ではその追懷は、ありし日の六条院の輝きの思い出というよりは、より直接に、紫の上哀惜に引きしぼられていく。

「もてはや」してほしい「わがやどの花」も、「見はや」してほしい紅梅もともに、紫の上その人と、紫の上の象徴する六条院のありし春の日の栄光を指し示していることは間違ひなく、紫の上の真価を理解し、悲しみをともに分ち合うことのできる存在を、光源氏は唯一螢宮に見出していたのであ